



次に、熊本県の空にあっては南極の惑星を満喫できるつる座。

10月5日 22時の熊本市の空を再現してみました。つる座境界線の最南端でさえ地上に出ています。東京23度まで北上するとβが地平線上1.4度、札幌市ではβも地平線下になるのですから、全影を楽しむことができるのはとても恵まれたことなのです。

つる座はフォーマルハウト(α PsA, 1.2等)の南に位置し、胴本に輝くα(1.7等)・β(2.1等)と、頭のγ(3.0等)を括弧して足下まで星を繋ぐと、脚裏のツルの姿が浮かびます。まるで上(北)のみなみのうお座をついばんでいる様ですね。15世紀のスペインの航海家は、やはり脚の長い鳥“フラミンゴ”の名で呼びましたが、バイエルによってツルになったと言われます。

つる座は、ドイツのヨハン・バイエルが、オランダの航海士ピエトル・デイルクス・ケイザー(ラテン語名ペトルス・テオドリ)の手記を参考に星表『ウラノメトリア』(1603年)で判定した星座の一つ。日本でお馴染みのツルは、西洋でも天頂高く飛ぶ姿から縁起の良い鳥とされ、エジプトでは天文学者の象徴、またローマの鳥占いではワシやハゲワシと並んで尊ばれていたそうです。

つる座に関連したギリシア神話は特に知られませんが、キリスト教関連では『旧約聖書』エレミヤ書(\*)に出てくるコウノトリとされていました。同書の同じ節でツルの名も出ていますが、何故コウノトリなのでしょうね。(※財団法人日本聖書協会『聖書』新共同訳よりエレミヤ書8章7節; 空を飛ぶこのとりもその季節を知っている。鳥もつばめも鶴も、渡るときを守る。)

このほか古代アラビアではつる座のαとβを“二羽の鳩”と呼び、太平洋のマーシャル諸島の人々はつる座を魚釣りの釣り竿に見ていました。

旧約書を持つ星はαとγで、αはアラビア語で“輝くもの”という意味のアルナイル。もともと“魚の輝星”という意味で、古代アラビアでみなみのうお座に属していた名残です。α星のほか、β δ θ ι λなどがみなみのうお座に命まれたのではないかと考えられています。

γ星アルダナブはアラビア語の“鳥”が語源で、デネブ(はくちょう座α)、デネボラ(しし座β)、デネブ・カイトス(くじら座β)などと同じ語源です。つる座ではβの位置にあるので、やはり古代アラビアの星座が語源でしょうか? 詳細は下頁です。

